

学会史・資料

日本古生物学会学会史 [平成17年(2005)~平成21年(2009)]

矢島道子

東京医科歯科大学教養部

History of the Palaeontological Society of Japan, 2005–2009

Michiko Yajima

Tokyo Medical and Dental University

本会創立75周年にあたり、この5年間の学会の歩みを前回(化石78号)の記録を追補する形で表記した。なお、定期刊行物の出版記録はべつにまとめたので年表では省略した。

学会史年表

平成17年(2005)

学会行事

1月21日 山形テルサにて臨時総会を行い、UniBio Pressの編集を行っている日本動物学会の同じ住所(113-0033 東京都文京区本郷2-27-2東真ビル内)に古生物学会の事務局を設置した。

1月21日~23日 第154回例会を山形大学で開催(参加者156名)。シンポジウム「西太平洋におけるIMAGESコアを用いた高時間解像度の環境復元」(講演7件)、一般講演60件(口頭51件、ポスター9件)、普及講演会「化石から探る山形の昔」。

7月1日~4日 2005年年会・総会を東京大学理学部にて開催(参加者361名)。総会で論文賞を石川牧子・加瀬友喜・筒井秀和・東條文治、須藤 斎、疋田吉識・鈴木清一・都郷義寛・井尻 暁君に、学術賞を生形貴男、藻谷亮介、神谷隆宏君に、貢献賞を朝倉書店に授与。糸魚川淳二君を名誉会員に推戴。日本古生物学会創立70周年記念シンポジウム「地球生命史研究の最前線」(講演9件)、一般講演件136件(口頭105件、ポスター31件)、ショートコース「進化古生物学のツールキット」。

学会後援行事

1月8日 分類学会連合総会およびシンポジウム「種の違いをどのように見分けるか：生物を種の単位で見よう」
タイプ標本データベースをwebで公開。

11月20日 大阪市立自然史博物館にて自然史学会連合講演会「科学への入り口“自然史”―第一線の専門

家が語る10のとびら」を開催した。

会員動向

6月30日現在、会員は1147名。

平成18年(2006)

学会行事

2月3日~5日 第155回例会を京都大学総合博物館で開催(参加者219名)。会長講演、特別講演(4件)。一般講演91件(口頭66件、ポスター25件)、普及講演会「白亜紀の哺乳類学―日本と中国を結ぶ発掘調査」。

6月23日~25日 2006年年会・総会を島根大学で開催(参加者202名)。総会で学術賞を北村晃寿、遠藤一佳君に、論文賞を淵上武士・佐々木猛智君に授与。シンポジウム「日本海の生物相の変遷と環境変動：過去、現在、そして未来へ向けて」(講演8件)、一般講演104件(口頭69件、ポスター35件)、普及講演会「島根県の化石の世界、恐竜研究の最前線」。

学会後援行事

1月7日 国立科学博物館分館にて、日本分類学会連合第5回公開シンポジウム「ミドリムシは動物？それとも植物？：原生生物の不思議な世界」

1月8日 国立科学博物館分館にて、日本分類学会連合主催、日本におけるドイツ年記念シンポジウム「日独学術交流史―相模湾動物相調査の歴史と成果」

11月12日 自然史学会連合シンポジウム「教科書で学べない自然史」を神奈川県立生命の星・地球博物館で開催。

会員動向

2月25日 棚井敏雅元会長・名誉会員逝去。

山田佳邦、箕輪美雪会員、氏家 宏元会員逝去。

6月30日現在、会員数は1155名。

平成19年（2007）

学会行事

2月2日～4日 第156回例会を徳島県立博物館にて開催した（参加者206名）。シンポジウム「古生物学のアウトリーチ」（講演6）、招待講演1、一般講演93件（口頭65件、ポスター28件）。普及行事子どもワークショップ「三葉虫を調べよう」、普及講演会「植物に間違えられた海洋生物の行動化石」。

3月19日 古生物学スプリング・ワークショップ「The解剖学」開催（参加者34名）。

6月29日～7月1日 2007年年会・総会を大阪市立大学で開催（参加者319名）。総会で栗田裕司、入月俊明君に学術賞、嶋田智恵子・谷村好洋、伊藤泰弘、久保田克博君に論文賞を授与した。長谷川善和、猪郷久義、加藤 誠、小島郁生君を名誉会員に推薦。シンポジウム「古生代および中生代における温室期の地球生物相」（講演6件）、特別講演2件、一般講演129件（口頭86件、ポスター43件）。

学会後援行事

1月7日 分類学会連合シンポジウム「分類学の教育」
11月25日 自然史学会連合シンポジウム「いきもの・ひと・みずの自然史」を琵琶湖博物館で開催。

会員動向

10月26日 花井哲郎元会長・名誉会員逝去。
解良正利、多井義郎会員逝去
6月28日現在 会員は1076名。

平成20年（2008）

学会行事

2月1日～3日 第157回例会を宇都宮大学と栃木県立博物館で開催（参加者277名）。シンポジウム「中～高緯度の両極性分布を持つ生物から見た地球史」（講演7件）。一般講演97件（口頭69件、ポスター28件）。普及講座は「化石三昧で楽しもう」、普及講演会は「栃木の大地に眠る化石たち—微化石から哺乳類まで」。

7月4日～6日 2008年年会・総会を東北大学および仙台市科学館で開催（参加者309名）。総会で、池谷仙之君に学会賞（横山賞）を授与。真鍋 真君に学術賞、椎野勇太・鈴木雄太郎、佐藤友美・神谷隆宏君に論文賞を授与。鎮西清高、濱田隆士、速水格君を名誉会員に推薦。シンポジウム「環境指標としての後期新生代微古生物学と古海洋学の進展」（講演6件）、会長講演1件、特別講演2件、一般講演129件（口頭91件、ポスター38件）。ミニ企画展「竜の口層のクジラ化石」。

学会後援行事

1月12日 国立科学博物館分館で分類学会連合シンポジウム「動物界高次分類群の系統と分類—発生から

分子へ」が開催された。

11月15日 自然史学会連合シンポジウム「自然史研究最前線—恐竜からDNAまで」を千葉県立中央博物館で開催。

会員動向

2月17日 菅野三郎名誉会員逝去。
本田 裕、神谷敏詩、加藤又二郎、内藤源太郎会員逝去。
7月3日現在 会員は1093名。

平成21年（2009）

学会行事

1月30日～2月1日 第158回例会を琉球大学と沖縄県立博物館で開催（参加者232名）。シンポジウム「琉球列島の固有生物相の起源と成立プロセス」（講演7件）。一般講演116件（口頭64件、ポスター52件）。普及講演会は「琉球列島に固有な生物相はどのようにして生まれたか—最新の研究成果から—」。

6月26日～28日 2009年年会・総会を千葉大学で開催。参加者315名。総会で高井正成、上野勝美君に学術賞を授与。伴野卓磨、山川千代美・百原 新・布谷知夫・松本みどり・綿野泰行君に論文賞を授与。坂上澄夫君を名誉会員に推薦。シンポジウム「パレオバイオロジーから地球生命科学へ」（講演6件）、特別講演1件、一般講演129件（口頭91件、ポスター38件）。

学会後援行事

1月10日 国立科学博物館分館で分類学会連合シンポジウム「分類学におけるDNA情報の活用」が開催された。
11月7～8日 自然史学会連合シンポジウムを石川県立自然史資料館・石川自然史センターで開催。

会員動向

2月7日 松本達郎名誉会長逝去。
4月6日 勘米良亀齢名誉会員逝去。
11月25日 市川浩一郎名誉会員逝去。
鎌田康彦、黒沢利衛、高橋武美、鈴木康司会員逝去
6月25日現在 会員は1055名。

役員名簿

アルファベット順、*は常務委員

平成17～18年（2005–2006）

名誉会長 松本達郎

会長 北里 洋

評議員 安達修子、天野和孝、安藤寿男、長谷川四郎、平野弘道、平山 廉、加瀬友喜*、甲能直樹、近藤康生、前田晴良*、間嶋隆一*、真鍋 真*、西 弘嗣*、尾田太

良, 小笠原憲四郎*, 大野照文, 大路樹生*, 小澤智生, 瀬戸口烈司, 棚部一成, 富田幸光, 生形貴男*, 植村和彦*, 柳沢幸夫*

幹事 豊福高志, 鈴木雄太郎, 重田康成, 利光誠一, 兼子尚知, 中島 礼, 遠藤一佳, 本山 功, 樽 創, 田口公則, 大花民子, 河潟俊吾

会計監査 佐々木猛智

平成19～20年(2007-2008)

名誉会長 松本達郎

会長 小笠原憲四郎

評議員 安達修子, 天野和孝, 安藤寿男, 遠藤一佳*, 長谷川四郎, 平野弘道, 加瀬友喜*, 北里 洋, 甲能直樹*, 近藤康生*, 前田晴良*, 間嶋隆一*, 真鍋 真*, 松岡篤, 西 弘嗣*, 尾田太良, 大野照文, 大路樹生*, 棚部一成, 富田幸光, 生形貴男*, 植村和彦, 矢島道子, 柳沢幸夫*

幹事 鈴木雄太郎, 中島 礼, 田中源吾, 佐々木猛智, 重田康成, 樽 創, 大花民子, 河潟俊吾, 和仁良二, 岩井雅夫, 村山雅史, 佐藤たまき

会計監査 谷村好洋

平成21～22年(2009-2010)

会長 加瀬友喜

評議員 安達修子, 天野和孝, 安藤寿男, 遠藤一佳*, 長谷川四郎, 平野弘道, 平山 廉, 北里 洋, 甲能直樹*, 近藤康生*, 前田晴良*, 間嶋隆一*, 真鍋 真*, 松岡篤, 西 弘嗣*, 小笠原憲四郎, 大路樹生*, 佐藤たまき*, 棚部一成, 富田幸光, 生形貴男*, 植村和彦, 矢島道子, 柳沢幸夫

常務委員: 大花民子*

幹事 鈴木雄太郎, 中島 礼, 田中源吾, 佐々木猛智, 河潟俊吾, 和仁良二, 岩井雅夫, 村山雅史, 奈良正和, 入月俊明,

会計監査 松本みどり

学会賞・学術賞・論文賞・貢献賞, 優秀ポスター賞受賞者名簿

(2005～2009年度のみ。学会賞・学術賞・論文賞・貢献賞については, 受賞日は各年度翌年の総会。ポスター賞は同年の年会で受賞。敬称略)

学会賞(横山賞)

2007年度 池谷仙之

2009年度 北里 洋, 棚部一成

学術賞

2005年度 北村晃寿, 新生代後期の気候変動に対する貝

類群集の応答。

遠藤一佳, 無脊椎動物の分子生物学・生体鉱物学的研究。

2006年度 栗田裕司, 新生代渦鞭毛藻化石層序の研究。

入月俊明, 新生代貝形虫類の古生物学的研究。

2007年度 真鍋 真, 中生代爬虫類の古生物学的研究。

2008年度 高井正成, 霊長類化石の古生物学的研究。

上野勝美, 古生代有孔虫類の古生物学と東アジアの地体構造発達史。

2009年度 平山 廉, カメ類の古生物学的研究。

長谷川卓, 白亜紀の古環境学的・層序学的研究。

甲能直樹, 海生哺乳類の古生物学的研究。

論文賞

2005年度 洲上武士・佐々木猛智, The shell structure of the Recent Patellogastropoda (Mollusca: Gastropoda). *Paleontological Research*, 9(2), 143-168 (2005).

2006年度 嶋田智恵子・谷村好洋, Spatial variability in valve morphology of *Neodenticulata seminae*, an oceanic diatom in the subarctic North Pacific and the Bering Sea. *Paleontological Research*, 10(1), 79-89 (2006).

伊藤泰弘, Functional shell morphology in early developmental stages of a boring bivalve *Zirfaea subconstricta* (Pholadidae). *Paleontological Research*, 9(2), 189-202 (2005).

久保田克博, Charophyte gyrogonites from the Lower Cretaceous Kitadani Formation of the Tetori Group in the Takinamigawa area, Katsuyama City, Fukui Prefecture, central Japan. *Paleontological Research*, 9(2), 203-213 (2005).

2007年度 椎野勇太・鈴木雄太郎, Articulatory and muscular systems in a Permian concavo-convex brachiopod *Waagenoconcha imperfecta* Prendergast, 1935 (Productida, Brachiopoda). *Paleontological Research*, 11(3), 265-275 (2007).

佐藤友美・神谷隆宏, Taxonomy and geographical distribution of recent *Xestoleberis* species (Cytheroidea, Ostracoda, Crustacea) from Japan. *Paleontological Research*, 11(2), 183-227 (2007).

2008年度 伴野卓磨, Ecological and taphonomical significance of spatangoid spines: relationship between mode of occurrence and water temperature. *Paleontological Research*, 12(2), 145-157 (2008).

山川千代美・百原 新・布谷知夫・松本みどり・綿野泰行, Paleovegetation reconstruction of fossil forests dominated by *Metasequoia* and *Glyptostrobus* from the late Pliocene Kobiwako Group, central Japan. *Paleontological Research*, 12 (2), 167–180 (2008).

2009年度. 辻野 匠・前田晴良・前田陽子, Taphonomic processes in diatomaceous laminites of the Pleistocene Shiobara Group (caldera-fil, lacustrine), Northeastern Japan, *Paleontological Research*, 13 (3), 213–229 (2009).

山田晋之助・Dietmar Keyser: Cuticle formation of the adductor muscle attachment in a podocopid ostracod, as an example of a calcified arthropod. *Paleontological Research*, 13 (2), 103–118 (2009).

貢献賞

2009年度. Martin Janal, 両澤 譲・淑子, 相馬中村層群研究会, 大倉正敏

優秀ポスター賞

2005年年会. 多田洋平・北里 洋・山本啓之・棚部一成, 安定同位体比解析に基づくシロウリガイ微細成長縞形成シナリオの復元.

甲田篤郎・間嶋隆一・北里 洋・北崎朋美・和田秀樹・加藤和浩, 浅海域の冷湧水は氷河性海水準変動に同期して活動していた—横浜市南部の上総層群の例—.

清家弘治・奈良正和, 現世波浪卓越型砂浜海岸に見られるスナガニ属の巣穴形態とその意義.

2006年第155回例会. 成田敦史・松本みどり・山田敏弘, 北海道蝦夷層群三笠層から産出したスズカケノキ科 (Platanaceae, Proteales).

山口龍彦・長尾良一・神谷隆宏, 佐賀県古第三系杵島層産の貝形虫化石群とその意義.

2006年年会, 江上直子・中務真人・荻原直道, 霊長類の上腕骨遠位部内部構造の比較.

香月興太・瀬戸浩二・野村律夫, サロマ湖の珪藻遺骸群集が示す過去1世紀の人間活動と環境変遷の関連.

山田晋之介, 貝形虫類における hingement 形態の可塑性.

2007年第156回例会. Robert G. Jenkins, Andrzej Kaim・疋田吉識・棚部一成, 後期白亜紀メタン湧水における笠貝類の基質選択性.

庵谷奈津子・堀 利栄・池原 実, 海洋無酸素事変 (OAE1a) の検討.

中川良平・沼波 信・米田 穰・鶴野 光・柴田康行, 福岡県平尾台における第四紀末の哺乳類化石の群集解析と14C年代測定による動物群変遷の解明.

2007年年会. 竹内 猛・更科 功・飯島 実・遠藤一佳, 二枚貝における貝殻結晶多形制御メカニズム. 富田武照, “ナイフかフォークか?”—歯根形態に着目した化石板鰓類の化石板鰓類の摂食行動の推定—.

野村真一, 本邦中生界および新生界から産出する化石ミョウガイ類の発見とその意義.

2008年第157回例会. 梶 智就・塚越 哲, 節足動物の付属肢進化過程における関節と筋肉の相関の創出.

高橋昭紀・藤田知孝・松本 崇・平野弘道, 後期白亜紀 *Actinoceramus* 属 (二枚貝綱, イノセラムス科) の肋強度と堆積環境の関係. 中島保寿, 骨組織が示唆する原始的魚竜類の成長.

2008年年会. 千徳明日香・江崎洋一, 非造礁性群体六射サンゴの成長規則性—出芽の様式—.

高橋 聡・海保邦夫・山北 聡・鈴木紀毅・大庭雅寛・掛川 武・永広昌之, パンサラッサ海遠洋域におけるペルム紀末～三畳紀前期の海洋環境変動.

山田安美・伊藤 孝・本山 功・板木拓也・小泉 格・上栗伸一, 日本海の過去の2万年間の古環境復元—C-GC8コアの放散虫群集解析—.

2009年第158回例会. 足立奈津子・江崎洋一・劉 建波, コケムシ礁の出現とその後の後生動物礁の発展—下地形成作用の重要性—.

徳田悠希・池野知子・江崎洋一・後藤慎介・沼田英治, Flabellidae 科六射サンゴの分子系統解析と骨格形質の再評価.

富田武照, 古代ザメは泳ぎ続けないと呼吸できないか? 鰓骨格に着目した化石サメ類の呼吸システムの復元.

2009年年会. 河部壮一郎・下川哲哉・松田正司, 鳥類における脳容量の推定方法と古生物への応用. 伊庭靖弘・棚部一成・佐野晋一・御前明洋・寺部和伸, 白亜紀中期の北太平洋で発生したペルムナイト類の消滅とその要因.

学会定期刊行物目録 (2005–2009)

Paleontological Research

Vol.9, no.1, 8 articles, p. 1–94, April 30, 2005.

Vol.9, no.2, 6 articles, p. 95–216, June 30, 2005.

Vol.9, no.3, 4 articles, p. 217–272, September 30, 2005.
 Vol.9, no.4, 5 articles, p. 273–348, December 31, 2005.
 Vol.10, no.1, 7 articles, p. 1–98, April 30, 2006.
 Vol.10, no.2, 5 articles, p. 99–178, June 30, 2006.
 Vol.10, no.3, 5 articles, 1 short note, p. 179–266, September 30, 2006.
 Vol.10, no.4, Theme Issue: Frontier Researches in Japanese Paleontology, selected 8 papers presented in a symposium at the 2005 annual meeting of the Palaeontological Society of Japan, p. 267–415, December 31, 2006.
 Vol.11, no.1, 7 articles, p. 1–108, April 30, 2007.
 Vol.11, no.2, 6 articles, p. 109–230, June 30, 2007.
 Vol.11, no.3, 5 articles, p. 231–306, September 30, 2007.
 Vol.11, no.4, 5 articles, p. 307–359, December 31, 2007.
 Vol.12, no.1, 7 articles, p. 1–98, April 30, 2008.
 Vol.12, no.2, 7 articles, 3 short notes, p. 99–208, June 30, 2008.
 Vol.12, no.3, 6 articles, 1 short note, p. 209–308, September 30, 2008.
 Vol.12, no.4, 9 articles, 2 short notes, p. 309–429, December 31, 2008.
 Vol.13, no.1, Theme Issue: Paleozoic and Mesozoic Geobiota during Greenhouse Intervals, selected 5 papers presented in a symposium at the 2007 annual meeting of the Palaeontological Society of Japan, p. 1–102, April 30, 2009.
 Vol.13, no.2, 9 articles, 1 short note, p. 103–212, June 30, 2009.
 Vol.13, no.3, 9 articles, p. 213–308, September 30, 2009.
 Vol.13, no.4, 6 articles, p. 309–386, December 31, 2009.

化石

77号, 64p., 特集: 生物イベントとしての哺乳類の海生適応, 2005年3月.
 78号, 102p., 2005年9月.
 79号, 104p., 特集: 西太平洋におけるIMAGESコアを用いた高時間解像度の環境復元, 2006年3月.

80号, 84p., 2006年9月.
 81号, 116p., 特集: 腕足動物の古生物学, 2007年3月.
 82号, 102p., 特集: 日本海の生物相の変遷と環境変動—過去, 現在そして未来へ向けて, 2007年10月.
 83号, 96p., 特集: 古生物学のアウトリーチ—博物館での取り組みを例にして—, 2008年3月.
 84号, 123p., 2008年10月.
 85号, 79p., 特集: 中～高緯度の両極性分布を持つ生物から見た地球史, 2009年3月.
 86号, 107p., 特集: 後期新生代の環境指標としての微古生物学と古海洋学の進展, 2009年10月.

その他の出版物

2008年 Saito et al. (1981) の復刻版 CD-ROM の刊行

International Palaeontological Association (IPA) 年表 (日本古生物学会関係) 2001～2010年

2002年7月6～10日 第1回国際古生物学会議 (International Palaeontological Congress) がシドニーのマッコーリー大学で開催。日本からは23名が参加。

2006年6月17日～21日 第2回国際古生物学会議 (Ancient life and modern approaches) が北京大学で開催。日本からは46名が参加。6名の院生・ポスドクに学会から旅費の一部を援助。2006–2009年の役員 (members at large) に北里 洋就任。

2010年6月28日～7月3日 第3回国際古生物学会議がロンドン大学ロンドンのインペリアル・カリッジと自然史博物館で開催。日本からは18名が参加。5名の院生・ポスドクに学会から旅費の一部を援助。2010–2013年の役員 (副会長) に北里 洋就任。

(2010年6月23日受付, 2010年8月5日受理)

